

市民と大学と行政を結ぶ地域文化

- 多摩美術大学での講義を例に -

多摩美術大学大学院美術研究科デザイン専攻 堤 涼子
八王子市教育委員会生涯学習スポーツ部次長兼文化財課長（八王子市郷土資料館長）
多摩美術大学美術学部非常勤講師 佐藤 広

はじめに

八王子市は24の大学・短期大学・高専が設置されている学園都市である。八王子市基本構想・基本計画の『八王子ゆめおりプラン』でも、第1章、第2節に「学園都市の特性をいかした大学、企業との協働」をあげている（注1）。

こうした前提のもと、市内にある大学での講義の経験から（注2）市民と大学と行政との関係を考えてみた。市民、大学、行政のそれぞれに共通する地域文化を媒介として、それぞれの地域へ向けた活動が一体的に組織化されることによって、ダイナミックな地域社会を形成することができるのではないだろうか。地域で行われている個々の取り組みからスタートし、それらを持続可能な事業とすることが重要であると考えた。

こうした観点から、まず大学が存在する地域文化に触れ、それをベースにした講義といくつかの試みや展開を紹介し、市民と大学と行政とが連携・協働する場合の課題を整理したい。なお、堤涼子が3の地域文化の可能性—大学内の連携から市民と—を執筆し、他の部分の執筆と全体の構成を佐藤広が行った。

1. 大学はどこにあるのか - 地域文化の特色 -

講義では大学の存在する地域を活かすことに努めた。江戸時代の村落であり伝統的な日常生活の範囲であった大字で、学生が身近に実感できるキャンパス付近をこの場合の地域として設定した。ここでは八王子市鍵水である。多摩美術大学が位置する鍵水は、東京都や八王子市の指定文化財の4件が集中している歴史的特性を持っている。さらに八王子市教育委員会が所管する絹の道資料館が、市指定史跡絹の道（注3）に関連する施設として設置されている。

この鍵水には1955（昭和30）年に地域文化運動に努力した橋本義夫によって「絹の道碑」が建立され、1971（昭和46）年に多摩美術大学が八王子キャンパスを開設、1972（昭和47）年に八王子市教育委員会が絹の道を文化財（史跡）に指定、1990年（平成2）年には絹の道資料館が開館した。その当時と、今日のキャンパス周辺の環境は大きな変貌を遂げている。多摩ニュータウン事業の進展や交通機関の整備による八王子市南大沢や神奈川県相模原市橋本周辺の都市的な発展は、文化財や大学の存在意義も大きく変化させている。近年の短期間の変化は、伝統的な景観や文化財などの価値をさらに高めている。

多摩ニュータウン区域の西端に位置する鍵水は、柚木街道を境として二分することができる。北側は八王子市指定文化財（史跡）絹の道や同指定文化財（建造物）諏訪神社社殿があり、多摩丘陵の伝統的な景観が残されている。多摩ニュータウン区域内の道路南側に位置しているが、多摩丘陵の典型的な養蚕農家である東京都指定有形民俗文化財小泉家屋敷がある。

柚木街道の南側、多摩美術大学のあるエリアは多摩ニュータウンの開発区域で、近年は分譲されて大型店舗も展開して橋本や南大沢に連続する。近世と近代、近代と現代、伝統と現代と、流れる時間のリズムも質的に異なるかのような空間が対峙している。

歴史的な特性を記してみよう。八王子市の南部に位置している鍵水は古代から相模国と武蔵国

の境に近く位置し、南北に鎌倉道が東西には江戸道が通る。幕末における江戸湾防備の台場築造に際しては、用材の松丸太が鎌水の御林から伐り出された。その用材運搬では、舟運の発達していた相模川を利用し江戸湾へと運んでいる。平塚の港から相模川を介して海産物などの生活物資が神奈川県津久井郡方面や八王子方面に運ばれたルートを用いている。横浜開港による輸出用生糸の交易ルートとして横浜への浜街道、いわゆる絹の道が成立した。この交易や八王子の織物市を控え、鎌水からは在方の生糸商人が輩出されている。剣術、俳諧、説経節、明治には知識人による焼き物（鎌水焼き）が行われた。

大学の存在する場を漠とした地域ではなく、くっきりと輪郭をもった具体的なテーマや地域設定を行い、学術研究や学習の場として示すことによって、市民と大学と行政を結ぶ接点が明確になるのではないだろうか。大学はどこにあるのかと問われれば、このような地域にあると誰もが明確に答えられるようになりたい。多摩美術大学は、絹の道のある鎌水にあると。

2. 博物館学の講義 - 学生の眼差しを地域へ -

今日の博物館は社会的使命の遂行、社会から託された資料の保護・継承、新たな価値の創造などが求められている（注4）。そして、「所在地周辺の地域社会との関係づくりは、国立や私立の博物館であっても重要な課題の一つ」（注5）、「地域社会の捉え方を確認したうえで、その地域への貢献方法を明らかにすることが大事」とあり（注6）。地域は今日の博物館にとって重要な課題である。八王子市における歴史系博物館等は、市民の文化財保護運動を契機として1967（昭和42）年に、八王子市郷土資料館が開館した。1990（平成2）年には鎌水に、文化財施設として絹の道資料館が開館した。八王子市の文化財保護行政や博物館行政は、元々、市民や地域文化と密接に関係して展開してきているのである。

行政はこうした施設の利用やそこに蓄積された情報を大学に提供することができる。また、大学は高度な学術研究の面で地域への情報提供や蓄積に貢献することができる。この関係性を深める一つの方法が、行政職員の大学への講師派遣である。

理論と同時に、実際の講義では生の行政の状況を伝えることに努力した。そこで、博物館学の講義で、学生には地域を定め、地域博物館の学芸員の立場から思考することを求めた。期末などのレポート課題は鎌水や学生が現在住んでいる場所、ふる里などをフィールドとして、博物館を軸にしたイベント提案とした。学生から提出されたレポートは絹の道資料館や長池ネイチャーセンター（八王子市別所）で公開し、市民の目に直接触れるようにした。イラストなどを用いた美大生らしい分かりやすいイベント提案は市民に好評で、イベントの実現などを求める市民の意見もみられた。

学生は講義を通じて地域を意識した。授業の感想では、小学生のころの郷土学習を思い出し、これまで地域を学ぶ機会が少ないことに気付いた学生もいた。博物館が既存の考え方からさらに発展するため、地域の歴史を、現在の社会的観点から新たにその知識や情報を深めることは、地域の発展や地域振興のための重要な役割といえる、あるいは、学生も地域に出て行くことを望んでいるが、そのきっかけを見つけられずにいるのが現状である、などの意見もあった。大学で学生を対象に実施した平成17年度授業評価アンケートで、この授業で学んでいることは多いですかとの質問に、強くそう思う、そう思う、の2項目を合わせると72.3%の回答であった。これは地域をテーマにしたアンケートではないが、この数値は“地域”が浸透したことを示しているのではないか。

講義では市民との係わりを重視した。その実践がレポートの展示公開であり、展示がきっかけで鎌水の大塚山公園のアドプト（注7）に登録している東南部地区環境市民会議で作成したエコミュージアムマップを合わせて展示した。また、郷土資料館が育成した市民グループ桑都民俗の会主催で、「初秋の里山を歩く 絹の道と多摩美術大学の見学」を開催した。博物館学の受講生と市民が、鎌水の史跡や文化財を見学しながら交流し、市民は大学図書館などのキャンパス見学

も行った。この見学会に参加した桑都民俗の会会員の中野八重さんは、学生の依頼によって八王子の伝統的な暮らしぶりを東洋美術史ゼミで語っている。

学生が地域への眼差しを持つことにより、新たな人々を発見して自分自身の可能性を自覚する、そんな場が八王子市の自然と歴史の豊かな鍾水であったことを記憶に刻んでおいてもらいたい。



産経新聞（多摩版 平成 16 年 12 月 4 日）



絹の道資料館での展示（平成 18 年 3 月）

3. 地域文化の可能性 - 大学内の連携から市民との連携へ -

博物館学 の受講生であった私は、大学の所在する八王子という地域を意識するようになった。そして、このフィールドを活かして、学生としての活動が実現できないものかと模索していた。ちょうどその時期に、八王子市市民活動推進部学園都市文化課から市内の各大学に向け、八王子をテーマとした研究課題の募集があった（注 8）。東洋美術史ゼミの近藤秀實教授は授業でしばしば絹の道資料館を利用しており、同館の一つ目伝説（注 9）の展示に関心を持たれていた。近藤教授に協力し、多摩地域に濃く分布し伝承されていた一つ目伝説を研究課題として取り上げ、応募することとなった。

私は学生代表として東洋美術史ゼミの授業で、一つ目伝説の研究に取り組んだ。その研究手法としては八王子市内での聞き取り調査や、一つ目伝説に関係している事八日という年中行事に関するアンケート調査を学生対象に実施した。また、民俗調査では実際に人に会って得られた聞き取り資料を分析、考察することを試みた。その際、博物館学 担当の佐藤講師に相談し、聞き書きなどの民俗調査の指導や八王子市内の話者の紹介などを依頼した。

以下に平成 18 年の活動を記してみる。

- 7 月 八王子市内にて、多摩美術大学学生による聞き取り調査を実施
話者…八王子市出身 96 歳 男性、中野八重さん 八王子市出身 87 歳、小泉茂さん
八王子市鍾水在住 83 歳（このとき、小泉さんには一つ目小僧の絵＜八日僧
風景＞を描いてもらった。）八王子市出身 87 歳 女性、同 女性、横浜市出
身 87 歳 女性、長野県出身 91 歳 女性、岩手県出身 男性、静岡県出身 男
性、佐賀県出身 89 歳 女性、高知県出身 男性
- 7 ～ 9 月 多摩美術大学にて、学生に事八日に関するアンケート調査を実施
- 10 月 7 日 研究発表 東京国立博物館資料館第一セミナー室にて 民族藝術
学会第 54 回東京研」究例会 テーマ「事八日と一つ目伝説」
- 10 月 14 日 八王子市立中山中学校にて、近藤教授らの特別講義、八王子市立中山中学校「地
域交流の日」、テーマ「わが家のお雑煮 八王子の妖怪」

12月16日 学生と市長とのふれあいトークにて研究発表

That's 八王子学—学生が提言するまちづくりとは—

テーマ「八王子の美術・文化・思想—八王子の一つ目伝説—」

一つ目伝説といった地域の民俗文化を介し、学生が地域社会に関心を寄せることによって、市民と学生とが交流する機会が生まれた。また、大学ではグローバルな視点を持つことができる。聞き取り調査を実施した東洋美術史ゼミの受講生には、韓国や中国の留学生が在籍していた。市民の中野八重さんは話者として授業に出席し、八王子の伝統的な生活文化を語った。八王子の伝統文化を伝承する中野さんは、熱心に耳を傾ける留学生の姿に出会い、地域を語ることの新たな意義を見出された。一方、学生は大学を暖かく見守り理解を示す地域の人々の存在を知ることができた。

この活動を通して話者は地域文化を伝えるという役割を得、学生は自分のかかわる新たな地域を知り、実際の地域社会とのかかわりを持つことができた。さらに、近藤教授による中国での民俗調査や、中国や韓国の留学生らが行った出身国での調査を合わせ、八王子周辺に伝承されて来た一つ目伝説は、中国、韓国へと広がりを持つ学術的にも興味深い研究となった。



大学生による聞き取り調査の様子



八日僧風景（画：小泉茂氏 鑑水在住）

4．これからの市民、大学、行政の協働へ

お互いが知り合うことが最も重要である。何よりも人と人が出会うことが始まりである。市民は大学を知らない、大学、学生は地域を知らない、これが大学での講義を行っての実感である。機会さえあれば市民も新たな関心を大学に寄せ、学生も地域社会への関心を高めることは確実である。その機会が行政が設け、持続的な活動を保障することが重要である。

ここでは行政職員による大学での講義を軸に地域文化を介し、市民と大学・学生との連携を試みた。その講義が動機付けとなり、行政が管理・運営してきた郷土資料館や絹の道資料館、行政の指定した史跡などの文化財を活用し、市民と学生とが交流する機会が生まれた。また、行政からの研究課題の募集という事業が動機となり、主体的な学生を通しての授業を媒介に、八王子周辺に伝承されている一つ目伝説という地域の伝統文化が、中国や韓国との比較文化研究の素材となった。その過程で、市民は八王子に伝わる地域文化の価値を再認識することができたのである。

これらのわずかな経験ではあるが大学と行政が連携し、市民や学生が相互に交流できる継続的な場が大学内や行政機関に設置されれば、市民や学生が抱える課題解決をともに目指すことができる。具体的には、まずは大学教員や学生が地域のイベントや行政の政策形成、事業展開などに気軽に参

加できる分かりやすい入口を設けることである。地域の歴史や伝統文化においては、この入口は地域の歴史系博物館が担っても良いのではないだろうか。もちろん、専門性を持ったマネジメントのできる人が配置されなければならない。

ここで指摘したことは、すでに同様なことが他の分野で試みられ、実績をあげられていることであるかもしれない、というおそれを抱きながらの指摘である。

本市としては市内の大学を有効にひとつくり・まちづくりに活かし、市民の視点で大学を再発見しなければならない。そうすることによって、大学の価値も、まちの価値もさらに高まることになるはずである。

おわりに

ささやかな後期のみの授業であったが、絶えず市民と大学と行政との関係を考慮しながら実践した。あらためて足元の地域文化を再考する機会ともなった。約 30 年前に郷土資料館で育成した市民の学習グループは活動の停滞をみせていたが、国際的な比較文化という新たな価値を発見したことは収穫であった。何よりも、学生と市民との出会いが実現し、連携・協働の糸口を見出すことができた。この小稿も学生と執筆する機会に恵まれた。

市民と大学と行政、それぞれを結ぶ地域社会には計り知れない多くのものが秘められている。地域社会には何も無いのではなく、私たちには見えていないだけなのである。市民が日々の生活を営む豊かな地域社会を、まず知ることが重要である。そのためには大学と行政とが、地域を知るための知の道具を用意する必要がある。

最後に、市民によるキャンパスの見学に際して、また本稿をまとめるにあたって、多摩美術大学教務部事務部長荒川直氏、同博物館学芸員履修課程責任者の近藤秀實美術学部教授のご協力・ご指導をいただいた。心から感謝申しあげる。

注

- 1) 八王子市企画政策室『八王子ゆめおりプラン』八王子市 2003 年 39 頁
- 2) 平成 16 年度から多摩美術大学美術学部の非常勤講師を委嘱され、八王子市教育委員会の兼業許可を得て博物館学芸員課程履修者必修科目である「博物館学」(博物館経営論・情報論)を担当している。講義は後期授業で毎年度ほぼ 14 回、公務のない毎週土曜日の 1 時限に行っている。登録学生数は各年度とも約 100 名前後である。
- 3) 絹の道については、馬場喜信『浜街道「絹の道」のはなし』かたくら書店 2001 年、都教育庁文化課『歴史の道調査報告書 第四集 浜街道』東京都教育委員会 1996 年などを参照していただきたい。
- 4) 日本博物館協会編『博物館の望ましい姿 市民とともに創る新時代博物館』2003 年 7 頁
- 5) 同上 23 頁
- 6) 同上 23 頁
- 7) 市の支援の元に市民が主体的に公園の維持活動を行う制度で、まちなみ整備部公園課が所管している公園アドプト制度。
- 8) 市が市内の大学の研究室やゼミに八王子市に関するテーマでの研究を呼びかけ、平成 18 年 12 月 16 日に学園都市センターで、計 6 大学 11 団体の報告があった。市制 90 周年特別企画「第 2 回 学生と市長とのふれあいトーク」として開催。学園都市文化課が所管した事業。
- 9) 一つ目伝説とは、2 月 8 日と 12 月 8 日に一つ目小僧と呼ばれる、人びとに災厄をもたらす一つ目の妖怪が訪れるという伝承。南多摩地域の伝承は、早くから民俗学の柳田國男などから注目されていた。

(つつみ りょうこ)
(さとう ひろし)